



## 1年間の締めくくりに向けて

能登半島地震という予想もしなかった2024年のスタートから1ヶ月半が過ぎ、短い3学期も折り返しを迎えています。この1年間の振り返りをもとに、次年度の学校づくりの見通しを持つ時です。

子どもたちにも、この1年間での自分自身の成長を具体的に理解させ、進級や進学に向けての不安を解消し、期待感を持って4月を迎えることができるようにしていきましょう。同様に先生方一人一人についても、授業と授業研究を第一優先にした学校づくりの中で、この1年間、どんなことに気づき、どんな変化や成長があったのかを改めて確認してみることが大切です。日々の授業の中で、子どもたちがどのように変化してきたのかをぜひ振り返ってみてください。

### 【小中一貫教育担当者研修会】

1月23日(火)に各学校の担当者(教頭先生が大半)の方々がお集まりいただき開催されました。今年度の取組状況などを中学校区ごとにグループ協議を行い、小中連携の取組等における成果と課題や次年度に向けての方向性を確認しました。これまで実施したことをもとに、本当に必要なものは何かを見極め、新しい時代に真に目指すべき小中一貫教育のあり方を見定め、各学校の実態に即して効果的に実施できるよう期待しています。



## 「授業と授業研究を第一優先にした学校づくり」管理職研修会

11月の第3回、1月の第4回校長会議の際に開催させていただいた「授業と授業研究を第一優先にした学校づくり」管理職研修会。2月13日(火)には希望される管理職の先生方を対象に3回目の研修会を開催させていただきました。行事等の都合で参加できなかった学校の校長先生方からは、「残念でならない、3回目もぜひ聞きたかった。」という声もいただいております。各学校の校長先生が自校の学校づくりのために、授業と真摯に向き合ってくださっていることがたいへん嬉しく思いました。「学校は内側からしか変わらない」ともよく言われています。この研修会から学び、気づき、理解したことを、自校の様々な実態に合わせて取組を見直してみてください。2024年度のスタートに向けて校長先生の思いを先生方と改めて共有することができれば幸いです。

今号の「みち」コラムに掲載されている「聴く」ことMI(その2)には、子どもたちの探究の姿を見ている教師の「聴く」ことの大切さが描かれています。私は、ジャンプ課題を与えて活動させっ放しにして、子どもたちの困り感に寄り添うことができている授業を想起させられました。子どもたちに探究させるということは、教師自身に子どもたちをよくみる時間が生じるということです。

「5分で活動に入りなさい」とか「教師はできるだけしゃべらずに」とか言われてきましたが、実際は、「子どもたちの学びの姿をよくみて」「子どもたちのつぶやきや声にならない声をよく聴いて」ということなのだ、自分の頭の中で変換しています。



## どんな言葉が授業の支えになっていますか？

ここ何度かの研修会やこのセンターだより「みち」のコラム等の中で、庄司先生が取り上げてくださる話題の一つに「聴く」ことがあります。私自身が経験してきた昭和・平成の教師は、私自身をはじめとして、いかに「話す(教える)か」「いかに聴かせるか」に主眼を置いていたように思います。今、改めて自分が授業をするとしたら…と考えると、たくさんの言葉が頭の中に浮かんできて“ズキズキ ワクワク”してきます。自分がこんなことを意識して授業をしていたらなあという観点でいくつか紹介してみます。

### 【教師自身がワクワク】

○子どもたちが探究できるような課題は、教師自身がワクワクするようなものじゃないと

### 【シンプル】

○授業はシンプルに

- ・考え抜かれた問いに「何かな?」「どこかな?」「どちらかな?」
- ・追究できるツールを子どもの手元に
- ・子どもと子どもの対話を保障

○シンプル3原則

- ・“おとなりさん、何かあったらおとなりさん”
- ・「教えたこと」こそ「発見させる」←子どもが気づくしかけを作る
- ・まとめは自分の言葉

### 【「一人残らずすべて…」のマインド】

○「全員が同じこと」とは異なる

○どの子ども、100%(120%)、頭と心をアクティブにしている

→こうなるためのジャンプ課題

- ・「?」や「!」がある
- ・「こうかな?」とやってみる
- ・「こうだよな?」と聞いてみる

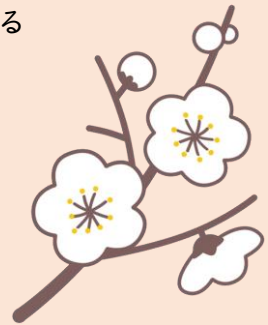
### 【結果的に教師はしゃべっていない】

○子どもたちの頭と心がアクティブになる課題にすれば、教師が話す機会がなくなる

→だからこそ教師は、子どもたちがどんな学びをしているのかみる

子どもたちがどんなことを考えているのかを聴く

【だから授業はおもしろい!】(まさしくその通り!)



## コラム 「聴く」ことのMI(その2)《No.07》

前回、古屋和久さんの「『学び合う教室文化』をすべての教室に」の中から「話の聴き方」を紹介しました。7項目あって、1番は「話をしている人の方を向く」。2番は「心の中で『おしゃべり』をする」等々でした。古屋さん自身が言うように、とても「アクティブな聴き方」です。市内0小のS先生は、「話をしている人の方を向く。」を「全身で聴く」に変えて7項目を教室に掲示して、聴き合い学び合うすばらしい複式のクラスを育てています。

通常、聴くことは受動的なことでされています。でも、話し上手の人は「聞き上手」だとも言われます。よく聴いて相手のことを理解すれば、伝えることもうまくなるでしょう。さらにです…。「聞き上手」で話し上手の人は、実は話す時にもよく聴いています。相手の様子を見ながら、通じていれば話を進めるし、うまくつながっていない、あるいはちょっと聞き逃したかなと見れば、どこがわからないか、どこまで大丈夫か尋ねたり、言い方を変えたり、相手に応じて自分の話し方も変えます。相手をよく見、聴き、相手に合わせて自分が変わります。話しながらそれをするということは、能動的にふるまいながら、他方でとても深く受動していると言えるでしょう。

受動と能動が、一人の一つの行為の中に同時にあります。話すだけならこちらからあちらへの一方向ですが、「聞き上手=話し上手」の人は「→」があちらに行きながら、こちらにも来ている…。つまり双方向性を有しつつ、自分が変わります。このような話し方(聴き方)をする教師のクラスでは、子どもたちも双方向のコミュニケーションを自然に学びます。話す時も受動性を持ちながら話すし、聴く時も能動的に「アクティブ」に聞くのです。こんなアクティブに聴き合い学び合う子どもを育てるための7項目なのです。S先生のクラス、参観したいですね。ではまた。